

【論文】

小学校英語教科書における コミュニケーション能力に関する情報の分析

坂 元 敦 子

Abstract

This paper analyzes information on communicative competence in Japanese elementary school English textbooks. The research aims to examine which Communication Strategies (CSs) are present and how these strategies are explained in English textbooks for sixth-grade elementary school students. The findings indicate that (i) the distribution of CSs in the textbooks is uneven, with the CS of “reacting” being more frequently observed than others, and (ii) coverage and explanations of CSs vary across textbooks; some include illustrations, Japanese translations, and contextual descriptions, whereas others provide only English expressions.

1. はじめに

2020 年（令和 2 年）4 月より、小学校、中学校、高等学校において、新学習指導要領が実施されている。この新学習指導要領では、小学校における英語教育が早期化・教科化した。従来 5・6 年生を対象に実施されてきた「外国語活動（英語）」は、前倒して 3・4 年生を対象とするようになった。併せて、5・6 年生を対象にした「外国語科（英語）」が導入されている。つまり、これまで 5 年生から開始していた英語の授業は 3 年生からと早まった上、高学年からは英語が正式な教科と位置付けられたことで成績評価も伴うようになった。

新学習指導要領によれば、3・4 年生を対象とした小学校外国語活動では「相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことが、5・6 年生を対象とした小学校外国語科では「他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことが目標のひとつとして挙げられている（文部科学省 2017a）。小学校学習指導要領の解説においても、「外国語学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である（文部科学省 2017b）」と記述されていることから、コミュニケーションが重視されていることが窺える。

外国語でコミュニケーションを図る際に必要とされる能力について、関谷（2003）は、(i) 言

語能力 (linguistic competence)、(ii) 語用言語能力 (pragmalinguistic competence)、(iii) 社会語用能力 (sociopragmatic competence) の3点に分類できると述べている。すなわち、実際のコミュニケーションで要求されるのは文法や発音の知識に関する言語能力だけではないということだ。

では、この文法や発音に関する知識以外の能力については、英語を学習する際に重要な情報源となる教科書の中でどのように扱われているのだろうか。海外で使われている教科書を対象にして、そこで扱われている語用論的情報を検証した研究は数多くあり、世界的に使用されている大手出版社のテキストを扱った研究 (Vellenga 2004) のほか、ベトナムの教科書を扱った研究 (Nu & Murray 2020)、中国の教科書を扱った研究 (Zhou & Zeng 2023) などがある。日本で使われている教科書を対象にした研究も進められている。かねてより英語が必修科目に含まれていた中学校や高等学校の教科書を対象にした分析は、これまでにこなされてきた (深澤 2000、河村 2002、内田・野村 2009、Shimizu et al. 2007、水島 2016、大須賀 2024 など)。例えば大須賀 (2024) は、新学習指導要領を踏まえて 2022 年度から使用され始めた高等学校の「英語コミュニケーション I」の検定教科書 5 冊を取り上げ、言語の語用論的な側面の扱われ方を検証している。小学校における英語教育が導入されてからは、小学校の英語教科書を対象にした分析も進められている。例えば、学習指導要領改訂前の外国語活動において使用されていた副教材『Hi, friends!』と中学校の英語教科書に掲載されているコミュニケーション活動を扱った志村他 (2015) や、小学校 5 年生の英語教科書に登場する対話の分析を行った大槻 (2022) などがある。しかし、新学習指導要領施行後の教科書を対象にしたものはまだ数が少ない。

そこで本稿では、小学校 6 年生用の最新の英語教科書に焦点を当て、実際に意思疎通を図る際に必要となるコミュニケーション能力に関する情報がどのように記述されているかを分析する。構成は以下の通りである。第 2 節では先行研究を概観し、続く第 3 節では調査内容とその結果を述べる。第 4 節では、調査結果を踏まえた考察を行う。最後の第 5 節は、結論とまとめである。

2. 先行研究

本節では、まず、コミュニケーション能力とはどのような能力なのかについて、先行研究における記述を確認する。続けて、第二言語におけるコミュニケーション能力の習得について、先行研究でこれまでにどのような指摘がなされているのかについて概観する。

2.1. コミュニケーション能力

「コミュニケーション能力 (communicative competence)」という概念は、Chomsky による言語能力と言語運用の二分法が不十分であるとして、Hymes (1972) によって提示された。Hymes によると、「コミュニケーション能力とは言語そのものに関する知識だけではなく、言語を運用するうえでの能力、つまり、メッセージを伝えたり理解したりする能力やある特定の場面、対人関係の中で意味を交渉する能力のこと (JACET 教育問題研究会 2012)」である。コミュニケーション

ョンを円滑に進めるためには、音声、語彙、文法といった言語知識だけでなく、話し手が意図した伝達内容を状況に応じて適切に表現する能力も必要である、という考えである。

その後、この「コミュニケーション能力」は Canale & Swain (1980)、Canale (1983) によって4つの要素に細分化された。すなわち、音声、語彙、構文、文法などの言語知識に関する能力を指す「言語能力 (linguistic competence)」、一貫性・結束性を持った談話を構成する能力を指す「談話能力 (discourse competence)」、会話の相手や場面などに応じた適切な発話を行う能力を指す「社会言語的能力 (sociolinguistic competence)」、そして、聞き返しや言い換え等、実際のコミュニケーションの中で文法的な能力の不足を補う能力を指す「方略的能力 (strategic competence)」の4つである。

この考えを踏まえて、Savignon (1983) は、学習者がコミュニケーション能力を伸ばしていく様子を逆ピラミッドモデルで示した。下に示す [図1] はその後改訂されたモデルであり (Savignon 2002)、図中の“SOCIOCULTURAL” “STRATEGIC” “DISCOURSE” “GRAMMATICAL” はそれぞれ、Canale & Swain (1980) における「社会言語的能力」「方略的能力」「談話能力」「言語能力」を指す。図で示されるように、コミュニケーション能力が発達するにつれて (左端の下から上へ延びる矢印)、4要素の重要性の割合は徐々に変化していく。最初期から存在する「方略的能力 (STRATEGIC で示されている白地の部分)」は、学習者が他の3つの能力を獲得する過程で相対的に重要性が低下するものの、どの段階でも存在している。Savignon によると、この方略的能力を効果的に使うことは、実際のコミュニケーションの中で重要であり、コミュニケーション能力の高い人とそうでない人を分けることにつながるという。

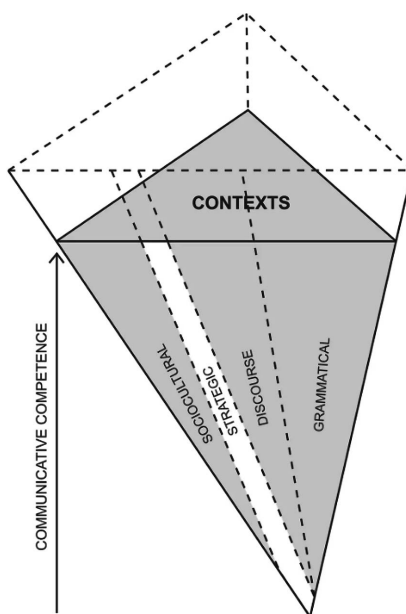


図1
(Savignon, 2002, p.8)

この方略的能力が具体的に現れた事象として、聞き返しや言い換えが挙げられる。これらの方略はコミュニケーション・ストラテジー（CS）と呼ばれており、その種類や分類については様々な研究がなされている（Tarone 1981, Celce-Murcia et al. 1995 など）。その中で、泉（2017）は、小学校で指導するのが望まれるストラテジーとして〔表 1〕の 7 項目を示している。

表 1

ストラテジー	例
1. 時間を稼ぐ、考えていることを伝える	Well, / Let's see... / Um...
2. もう一度言ってもらう	Sorry? / Pardon?
3. 助けを求める	How do you say ...?
4. 確認する	What do you mean? / Do you understand?
5. 分からない単語や表現にジェスチャーを用いる	(gestures)
6. 反応する	Great! / Me, too. / Too bad.
7. 相手に意見を求める	How about you?

(cf. 泉, 2017, p.27)

ここまで見てきたように、「コミュニケーション能力」という言葉が指す能力は、細かくとらえると 4 つの能力から成っている。本稿では、その中でも、最初期から継続して存在する「方略的能力」に焦点を当てる。具体的には、泉（2017）で示されている CS を分析の対象とする。

2.2. 第二言語におけるコミュニケーション能力の習得

学習者に対して CS を明示的に教えることについては、大きく 2 つの立場に分かれている（Yule & Tarone 1997）。一つは、教授する必要はないという立場である。この立場としては、すでに第一言語で獲得しているから教育は不要、ストラテジーよりも言語を教えるべきだという意見があるが、いずれも実証的研究に基づく指摘ではない（椿 2010）。もう一つは、教授する必要がある、あるいは教授することが有効であるという立場である。例えば Dörnyei（1995）は、英語を学ぶハンガリーの中学生を対象にした実証研究を行い、CS を明示的に教授することでストラテジー能力が向上したと述べている。同じく Nakatani（2005）は、英語を学ぶ日本の大学生を対象にした研究において、明示的な CS の指導によって、口頭能力の評価点数やストラテジーの使用数が有意に伸びたことを報告している。CS を明示的に指導することは、全く指導しない場合や暗示的に指導した場合に比べて英語の使用を促進させ、コミュニケーションを続けようとする態度の育成にも有効であるという日本の中学生を対象とした実証研究もある（丹藤 2003）。これらの実証研究を踏まえると、第一言語を通してすでに身につけているとしても、CS を明示的に提示することには一定の効果があると言えそうだ。

3. 調査内容

3.1. 研究課題

前節で確認した通り、CS はコミュニケーション能力を構成する「方略的能力」を支えるものであり、学習の最初期から継続して存在する。本稿では、小学校 6 年生用の英語教科書における CS の扱いに焦点を当てる。具体的には、次のように研究課題（RQ）を設定する。

RQ1：現行の小学校 6 年生向け英語教科書には、どのような CS が登場するのか。

RQ2：登場する CS は、どのように説明されているのか。

3.2. 対象

本稿で分析の対象とするのは、現行の小学校 6 年生向けの英語教科書に記述されている文である。分析に使用する教科書は、文部科学省による教科書検定に合格した [表 2] の 6 冊で、いずれも新学習指導要領を踏まえている。また、分析の対象とする CS は、2.1. で確認した 7 つの CS のうち、文字情報でないジェスチャーに関する CS を除いた 6 つの CS である。下の [表 3] は、2.1. の [表 1] から「分からない単語や表現にジェスチャーを用いる」という CS を除いたものである。教科書に記述がある文のうち、6 つの CS に該当する文を調べ、その登場延べ数をカウントする（ただし、付録ページはカウントの対象としない）。

表 2

教科書名	出版社	課数・ページ数
A. Here We Go! 6	光村図書出版	8 課・110 ページ
B. New Horizon 6	東京書籍	8 課・96 ページ
C. Crown Junior. 6	三省堂	7 課・112 ページ
D. ONE WORLD Smiles 6	教育出版	8 課・108 ページ
E. Junior Sunshine 6	開隆堂	8 課・129 ページ
F. Blue Sky Elementary 6	啓林館	8 課・132 ページ

表 3

ストラテジー	例
1. 時間を稼ぐ、考えていることを伝える	Well, / Let's see... / Um...
2. もう一度言ってもらう	Sorry? / Pardon?
3. 助けを求める	How do you say ...?
4. 確認する	What do you mean? / Do you understand?
5. 反応する	Great! / Me, too. / Too bad.
6. 相手に意見を求める	How about you?

3.3. 結果

全体の結果は、下の〔表 4〕の通りである。CS5（反応する）は、6 冊すべての教科書で登場しており、数も相対的に多かった。また、CS1（時間を稼ぐ、考えていることを伝える）は 3 つの教科書で、CS3（助けを求める）と CS4（確認する）は 2 つの教科書で登場していた。CS2、CS6 については、それぞれ 1 冊で登場していたのみである。

表 4

	CS1	CS2	CS3	CS4	CS5	CS6
A.	1	1	1	1	10	
B.	1				9	
C.					14	
D.			1		7	
E.					7	
F.	2			1	5	1

3.3.1. 教科書 A

教科書 A は、登場する CS の種類が最も多く、巻末の付録には CS がまとめられている。各課に「Response」というコーナーが設けられており、受け答えをする際に使える表現が紹介されている。各回とも、表現に対応する日本語と、表現に応じた表情・身振りのイラストが添えられ、例えば、“Wow! Really?” という表現が紹介されている課では (p.19)、「わあ！本当に？」という日本語とともに、顔の近くで両手を広げて驚いた表情を見せているイラストが添えられている。中ほどのページには、「相手の言葉をくり返す」「聞き返す」など、話を続けるために使える表現を考えさせる課題が用意されている。巻末の付録には、「教室で使う英語」として授業の中で使う英語表現がいくつか紹介されており、その中に CS3 が登場する（具体的には、“What’s ‘hasami’ in English?” とものの言い方を尋ねる文が日本語、イラストとともに掲載されている）。同じく巻末の付録に収録されている「Response」のまとめには、各課の「Response」で紹介されていた表現が整理されている。例えば、「会話で困った！ こんなとき、どうする？」という表題の下には「①すぐに返事ができない→『ええと…』と言って、考え中であることを伝えよう。」「②相手の言葉聞き取れなかった→『何と言いましたか。』と聞き返そう。」「分からないとき→『分かりません。』とすなおに伝えよう」という 3 項目があり、①には “Well, …” “Let’s see./Let me see.” という表現が掲載されている。教科書の中で登場した表現以外に “How about you?” と相手に意見を求める表現も紹介されており、付録を含めると、CS1 から CS6 までのすべてを網羅していることになる。

3.3.2. 教科書 B

教科書 B に登場する CS は、英語表現のみの場合もあればイラストが添えてある場合もある。「会話を続ける表現例」という記述はあるものの、英文に対応する日本語や当該表現を使用でき

る環境に関する説明は、教科書上には確認できない。例えば、“Cool!”という表現が紹介されている課では (p.30)、親指を立てるポーズをしている男の子のイラストのみが添えられている。

3.3.3. 教科書 C

教科書 C には、CS5 のみが登場する。イラストが添えられているが、日本語や使用環境に関する説明はない。例えば、住んでいる地域の好きな行事を共有する活動が掲載されている課では (p.27)、会話の相手に対して相槌を打つ男の子のイラストの横に吹き出しがあり、“I see.”という表現が入っている。延べ数は多いものの、重複する表現も多く、“That’s nice.” “Wow!” “I see.” “That’s great.” がそれぞれ 3 回ずつ登場している。

3.3.4. 教科書 D

教科書 D では、2～4 ターンの会話の中に CS が登場する。人物のイラストの周りに複数の吹き出しが配置され、発話の順序が数字で表されている。ただし、英文に対応する日本語や使用環境に関する説明は教科書上には確認できない。例えば、夏休みにしたことについて共有する活動が掲載されている課では (p.47)、2 人の人物の周りに 3 つの吹き出しがあり、番号順に読むと “What did you do?” “I saw a movie. It was fun.” “Cool!” という会話が成立している。巻頭には「Classroom English」として教室内で使う可能性がある表現を紹介するページがあるが、英文の記載はなく、QR コードを使って専用サイトを閲覧する必要がある。サイトには、同年代の子どもたちによるモデル会話の動画コンテンツが用意されており、英語の表現を確認することができる。また、巻末には、未知の単語に出会った際の対処法の一つとして、英語で先生に尋ねてみる事が挙げられている。そこには、“How do you say ○○ in English?” という表現が紹介されている。

3.3.5. 教科書 E

教科書 E の CS は、概ね各課に設けられた「Let’s say it.」というコーナー内のほか、発表に対する反応として登場する。イラストはあるものの、英文に対応する日本語や使用環境に関する説明は教科書上には確認できない。例えば、互いの食生活について共有する活動が掲載されている課では (p.39)、女の子のイラストの横に吹き出しがあり、“Really?”という表現が入っている。巻頭には「授業で使える 20 の表現」がまとめられており、「授業中・友達とのやり取り」として CS2 (“Excuse me?”)、CS5 (“I see.” “That’s nice.” など) が登場するが、添えられているのはイラストのみで、対応する日本語はない。使用環境については、イラストから推測できるものの日本語での説明はない。

3.3.6. 教科書 F

教科書 F では、まず「Activity」というコミュニケーション活動を行うコーナーに、イラストとともに CS が登場する。ただし、このコーナーには日本語や使用環境の説明がない。代わりに、各課 3 つずつ (第 1 課のみ 2 つ) 「Tips」というコーナーが設けられており、「友だちの話を聞いて、That’s great! (いいね) や I’m jealous! (いいなあ) などのあいづち表現を使ってみよう。」「迷っているときや少し待ってほしいときには、Well... や Let me see... などを使ってみよう。」

う。」のように使用環境の説明とともに CS が紹介されている回がある。巻頭の「コミュニケーションに大切なこと」、巻末の「会話を楽しむフレーズ集」には、イラスト、日本語、使用環境の説明とともに CS がまとめられている。例えば、巻末の「会話を楽しむフレーズ集」の「話をつなぐ」という項目には、“Wel...” “Let me see...” “Hang on.” という表現が掲載されており、日本語と思案中である様子の男の子のイラストが添えられている。付録を含めると、CS3 を除くすべての CS を網羅していることになる。

4. 考 察

本節では、調査結果について 2 つの研究課題に沿って考察する。

まず、1 つ目の「現行の小学校 6 年生向け英語教科書には、どのような CS が登場するのか。」については、教科書によって異なるものの、全体的な傾向としては CS5（反応する）を中心とした CS が登場していることが分かった。本稿が対象とした 6 つの CS のうち、CS5 のみがすべての教科書に登場する上に、その登場延べ数も多い。教科書によっては登場する CS が CS5 のみというものもあることを考えると（教科書 C と教科書 E の 2 冊）、教科書に登場する CS の種類は偏っていると言えるだろう。会話の相手が述べたことに対して「反応する」ことは、小学校という英語学習の初期にあつては重視されるべき CS かもしれない。しかし、コミュニケーションという双方向のやりとりにおいては、相手が述べたことが分からない際には繰り返してもらったり（CS2）、自身が考えている最中であることを伝えたり（CS1）するための CS も欠かせない。確かに、すべての CS を教科書本文で取り上げて説明を加えることは、紙幅の都合上難しいかもしれない。それでも、教科書 A のように付録としてでも収録されている方が望ましいだろう。

次に、2 つ目の「登場する CS は、どのように説明されているのか。」については、教科書ごとに大きく異なることが分かった。登場する英語表現について、どのような意味の表現なのか、どのような局面で使うことができるのかという説明が併せて掲載されている教科書がある一方で、添えられているのはイラストのみで、当該表現に関する詳しい説明は省かれているという教科書もある。CS は明示的に教授した方がよいとする先行研究を考慮すると、英語表現だけでなく、その説明も併せて提示されている方がよいと考えられる。授業内で教員が口頭による指導を行うことで補うことも可能だとはいえ、やはり重要な情報源となる教科書には、最低限の説明があってもよいだろう。

また、この「学習者にとって教科書は重要な情報源である」という観点から、もう一点付け加えたい。巻頭もしくは巻末に、CS をまとめたページを設けている教科書と設けていない教科書がある。設けている教科書でも、当該表現に対応する日本語と当該表現を使える環境に関する説明を併せて掲載しているものがある一方で、英語表現が教科書に掲載されていなかったり、対応する日本語が掲載されていなかったりする教科書もあり、扱いには差がみられた。なお、前者に

当たる、日本語と使用環境を併せて掲載している教科書は、登場する CS の種類も多い教科書 A と教科書 F であった。教科書には様々な活動が用意されているが、どのような内容であってもそれがコミュニケーション活動であれば、CS は関係する。このことを踏まえると、CS をまとめたページがあれば、授業内で実施される様々なコミュニケーション活動に取り組む際にも参照しやすく、より身につけやすくなると考えられる。

なお、今回得られた結果は、分析対象が小学校 6 年生向けの英語教科書に記述がある文に限定されている。教師用指導書を対象にすれば、異なる傾向が見えてくる可能性はある。ただ、あくまでも学習者が手元に置き参照するのは教科書であることを考慮すると、教科書上の記述が重要であると思われる。

以上のように、教科書に登場する CS には偏りがみられ、すべての教科書で CS5 に集中していた。ただ、CS の扱い（ほかにどの CS を取り上げるか、各 CS についてどの程度詳しく説明するか、CS をまとめたページを設けるか否か）については各教科書で違いがみられた。

5. おわりに

本稿では、小学校 6 年生用の英語教科書を対象に、(i) どのような CS が登場するのか、(ii) それらの CS はどのように説明されているのか、という観点から検証し、分析、考察を行った。(i) に関して言えば、全体的な傾向としては、どの教科書でも「反応する」という CS が最も多く登場していた。その他の CS については、まったく取り上げていない教科書から付録も含めればすべて取り上げている教科書まで様々であった。(ii) については教科書によって大きく異なっていた。イラスト・日本語・使用環境の説明を併せて掲載しているものがある一方で、英語表現のみが掲載されているものもあり、差がみられた。

参考文献

- Canale, M. (1983). From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy. In J. C. Richards & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and Communication* (pp.2-27). London: Longman.
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1(1), 1-47.
- Celce-Murcia, M., Dörnyei, Z., and Thurrell, S. (1995). Communicative competence: A pedagogically motivated model with content specifications. *Issues in Applied Linguistics*, 6, 5-35.
- Dörnyei, Z. (1995). On the teachability of communication strategies. *TESOL Quarterly*, 29, 55-85.
- 深澤清治. (2000). 「Pragmatic sensitivity を育てる教材開発への示唆的研究」『中国地区英語教育学会研究紀要』 30, 229-234.
- Hymes, D. (2001 [1972]). On communicative competence. In A. Duranti (Ed.), *Linguistic anthropology: A reader* (pp.35-71). Oxford: Blackwell.
- 泉恵美子. (2017). 「小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導」『京都教育大学教育実践研究紀要』 17, 23-33.
- JACET 教育問題研究会編. (2012). 『英語科教育の基礎と実践－成長する英語教師を目指して－』 東

- 京：三修社.
- 河村雅子. (2002). 「中学校英語教科書における依頼表現」『中国地区英語教育学会研究紀要』 32, 167-173.
- 水島梨紗. (2016). 「高等学校英語教科書における語用論的解説についての論考－「英語表現Ⅰ」の事例をもとに－」『札幌学院大学人文学会紀要』 99, 41-59.
- Nakatani, Y. (2005). The Effects of Awareness-Raising Training on Oral Communication Strategy Use. *The Modern Language Journal*, 89(1), 76-91.
- Nu, A. T. T. & Murray, J. (2020). Pragmatic content in EFL textbooks: An investigation into Vietnamese national teaching materials. *The Electronic Journal for English as a Second Language*, 24(3), 1-28.
- 文部科学省. (2017a). 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』
- 文部科学省. (2017b). 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』
- 大須賀直子. (2024). 「新高校英語検定教科書の語用論的分析」. 『明治大学人文科学研究所紀要』 91, 299-317.
- 大槻友紀. (2022). 「小学校英語教科書のコミュニケーションストラテジ的観点からの分析」. 『国際日本学研究論集』 15, 21-40.
- Savignon, S. (1983). *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Savignon, Sandra J. (2002). *Communicative Language Teaching: Linguistic Theory and Classroom Practice*. In Sandra J. Savignon (Ed.), *Interpreting Communicative Language Teaching* (pp.1-27). London: Yale University Press.
- 関山健治. (2003). 「第二言語語用論の潮流とこれからの英語教育」. 『語用論研究』 6, 47-56.
- Shimizu, T., Fukasawa, E., & Yonekura, S. (2007). Introductions and practices of speech acts in Oral Communication 1 textbooks: From a viewpoint of interlanguage pragmatics. *Sophia Linguistica*, 55, 143-163.
- 志村昭暢, 山下純一, 白田悦之, 横山吉樹, 萬谷隆一, 中村洋, 竹内典彦, & 河上昌志. (2015). 「小学校外国語活動教材と中学校英語教科書のコミュニケーション活動の比較－タスク性と動機づけを高める要素を中心に－」. 『小学校英語教育学会誌』 15(1), 112-124.
- 丹藤永也. (2003). 「英語によるコミュニケーション・ストラテジーが中学生の英語使用に及ぼす効果についての研究」『弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要』 1, 43-53.
- Tarone, E. (1981). Some thoughts on the notion of communication strategy. *TESOL Quarterly*, 15, 285-295.
- 椿由紀子. (2010). 「コミュニケーション・ストラテジーとしての『聞き返し』教育－実際場面で使用できる『聞き返し』をめざして－」『日本語教育』 147, 97-111.
- 内田諭・野村恵造. (2009). 「教材における語用論的情報－中学英語検定教科書を例に－」『多言語多文化共生社会に立脚したウエブ言語教材における言語能力運用記述モデルの研究（2005 年度～2008 年度科学研究費助成研究基盤研究（B））』, 18-33.
- Vellenga H. (2004). Learning pragmatics from ESL & EFL textbooks: How likely? *TESL-EJ*, 8, 1-18.
- Yule, G., & Tarone, E. (1997). Investigating communication strategies in L2 reference: pros and cons. In G. Kasper & E. Kellerman (Eds.), *Communication strategies: Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives* (pp.17-30). London: Longman
- Zhou, H., & Zeng, W. (2023). A Pragmatic Study on Primary School English Textbooks in Mainland China. *Advances in Social Development and Education Research*, 1(1), 93-102.

〔さかもと あつこ 言語学・英語学〕